

ジョン・ダン その生涯と精神と芸術

6. 変 化 (翻 訳)

その1

Translation of John Carey: *JOHN DONNE Life, Mind and Art*

6. Change

Part 1

後 藤 廣 文

Hirofumi GOTOH

変化は一六世紀の終わりには一般的な話題となっており、多くの人にとって事態は一層悪化しているように思われた。スペンサーは「無常」の恐ろしい像を創りあげ、シェークスピアはむさぼり食う時を詳しく描いた。牧歌、黄金時代の神話、清廉な初期キリスト教会に関する清教徒達の考え、古典文学の教育的効果といったこと等に思いを寄せることで変化する現在から救いを得ていた。が、世界は古い、長くは続かないと広く信じられていた。しかし、実に奇妙なことだが、この考え方はキリストの時代の始まりからずっと続いているという事実によって、信仰の信頼性が揺らぐことはなかったのである。ところが三世紀に聖シプリアンによって記録された世界の崩壊に関する所見が、現在の悲観的な見方を否定するというよりは肯定すべき証拠であるかのように、一六世紀にはためらうことなく引用されようになったのである。

ダンはこの世間一般に広がった暗い見方に積極的に加わった。『周年記念』同様説教の中で世界の病的症状の目録を作っている。そのいくつかは聖シプリアンから直接取ったもので現代人は背が低く、長生きできず、先祖より顔色が悪く、夏はかつて程快適ではなく、生まれたての子供の頭髪は灰色¹⁾だと書く。しかし、ダンの変化に対する関心はこういった一般的な想像で表されるもの以上に深く、より個人的なものである。無常を単に容赦のない外的な力とはみなしてはいない。むしろ無常は自分自身に起因するもので自らを語ることに（詩の中で繰り返し試みているように）変化を語ることであり、語る間に変っていくものであると見ている。既に詩——「日の出」「周年記念」——で見たように冒頭で言ったことと終わりで言うことが反対になっているが、こういった例とは別の例をこの章で見ることにする。

ダンは変りやすさを異常に意識してきたように思われる。時には冗談めかして言った。十八才の時に描かれた最も初期のものとして知られている肖像画には既に見たようにスペイン語で書かれた「心変わりをするよりは死を」というモットーがついている。しかし、心変わりしないという断言が本文に戻されると直ちに変化する。これはモンティメアの『ダイアナ』の中のダイアナがミレヌスに愛を誓う時に砂に書いた句でそれに続く行はその誓いに疑いをはさむのである。

Mira el amor que ordena

Que os viene hacer creer

Cosas dichas por mujer

Y escritas en el arena.

(愛が定めたことを見よ。定めに従ってあなたは女が言い砂に書いたことを信じるのだ。)²⁾ モットーの確信は崩れる。もはやどう理解してよいかわからない。ダンは肖像の中から不可解な眼で我々を見つめ、我々がまごつくのを眺めている。

同時に「女の不貞の擁護」の中で自分の変りやすい性格について腹立たしく思っていることがわかる。この中でダンは「無知で鈍い男は変ることが最も少ない」³⁾と言う。しかし、自分は気まぐれだという認識にも不安を覚えることがあった。『危篤時の信心』の中で自分の若い頃を「変りやすく、きまぐれで、優柔不断で」どう時間を過ごすか決めるのに時間がかかったと回想している⁴⁾。学生として何か特定のことを「信奉したり、打ち込んだり」することが苦手な深く追求することもなく次から次へと流されていたと言う。⁵⁾ 背教も概して変りやすい彼の性格の一つの表れであった。自制できない自分の変りやすさに怒りを覚えていたのである。意思がそれて萎えていくのをただ見守るしかなかった。

ころころ変る浮気心が、不自然なことに、
 変らない習慣を生む。その結果望まないのに
 恋の誓いでも、神への献身でも浮気を続ける。⁶⁾

祈っていても祈りに集中できない。自分の部屋で身体を投げ出して神よ、天使よお出まし下さいと祈る。

……神とその天使がここにいるのに、蠅の羽音や馬車のガラガラという音や戸のきしる音が聞こえると神と天使のことを忘れてしまう。同じ姿勢で祈りの言葉を述べ、あたかも神に祈っているかのように眼を上にあげ、ひざまづく。しかし、祈りながら神のことを少しも想っていないのだから神や天使に尋ねられたら答えられない。時として何をしようとしているのか忘れてしまっていることに気づくが、忘れ始めるとそれが何だったのかわからなくなる。⁷⁾

どんなことにも——膝の下の藁一本、頭の中に浮かぶある思い——気をそらしてしまっていることに気づくのである。詩想を促す不意の連想やそれていく考えや直ぐに熱中する性格が精神を集中させようとする時に障害となるのである。更に悪いことには言葉に敏感に反応する性格を抑えられなくて祈りの言葉にはふさわしくはない二重の意味を見つけ出そうとするのである。どんなに一生懸命追い出そうとしても放蕩をした若い頃の記憶すらも心の中に忍び込むのである。⁸⁾ 従って、粘り強く、再び試み、ひざまずき、世俗の想いを追い払い、全神経を張り巡らせて神に集中しようとしたのである。でも、うまくは行かなかった。「突然気が散り、集中できなくなり、空しい思いにと

らわれ、考えられなくなる。ひざまずいて祈るのだが何も考えられなくなる。」⁹⁾

説教でも同じであった。説教壇に立って話しているのだが心はおもむくままに飛んで行くのである。会衆にもこのことを告白している。

わたしの心が全てここにあるわけではありません。今ここにいてこの主題について説教しているのですが心は家の書斎にあって聖グレゴリーと聖ハイアロムのどちらがこの主題についてうまく述べているかを考えているのです。今ここであなた方にお話しているのですが、同時に途中で説教が終わったら皆さんが何と言うだろうということを考えているのです。¹⁰⁾

こういった不注意なこと自体は特に驚くべきことではない。こういうことは誰もが一度や二度は経験することである。我々の注意を引くのはダンの神経質なところであり、こういう失敗に明らかに動揺していることだ。みずからの散漫さに悩んでいるのである。

このような絶えざる想像癖のいくつかは実体が崩壊して断片化した状態に苛立ちを覚えていることにも原因がある。そのために絶対的なものを、完全なものを——「想像できる最高のもの」¹¹⁾を具体化するような（エリザベス・ドルアリーののような）想像上の女性を、説教にあるように「存在する全てのものだけではなく、存在しない全てのもの、存在するかもしれない全てのもの」¹²⁾を具体化する神を——熱望したのである。これは永遠や思索と深慮を飲み込んでしまう永遠の力を詳しく知りたいという熱意とも関連があり、より世俗的な段階では「世界という身体」¹³⁾と自分を結びつけてくれる仕事をしたいという願望にも関連があるのだ。つまり、これは様々な方法を使って魂の持つ様々な力を併合してそれを統一するような中心となるものが必要だということを示しているのである。『心霊修行』は同じ理由でダンにとって役に立つものであった。それによって精神集中の日課を課すことになるからである。

心が不安定で集中できなくなればなるほど自己を確定することが難しくなる。ダンは小さい頃の喪失感によってずっと不安を感じていたか少なくとも戸惑いを感じていて、それに対してどういう方策を取ったらよいのかということをもずっと考えて来たようだ。一五九〇年代にローランド・ウッドワードに送った書簡詩で、する必要があると考えていた自己確定の訓練を思わせる天日レンズのイメージを使っている。

我々自身を探そうではないか。何故ならば
水晶のようなガラスで光を収集すれば
ずっと強い力で太陽を通過させられるように。

我々自身の内面に注意を向けて、美德の火花を
燃え立たせれば、我々の心臓のまわりにある藁を
焼き尽くすことができるであろう。¹⁴⁾

このような単純な自己確定法では長く満足することはなかった。既に見たように詩中では自己は本来見つけられないものだということを認めている。「我々自身」は正確に言えば「我々にはわからないもの」¹⁵⁾である。一時的に生じるそれぞれ矛盾するさまざまな意識のうねりの中であって確固とした自己を浮かび上がらせることはできなかった。彼の詩にははかない存在——亡霊、鏡像、影、明滅しながら無に帰そうとしている人々——に満ちている。彼らの魂は周りの空気の中に蒸発して行く。恋する若者達の溜息が彼らを消耗させるのである。こういった消滅して行き勝ちなものに対する反作用として自己中心主義や自己劇化が生まれるのである。個としての存在が不確実なために詩に確固とした自己を印すことが絶対に必要であった。

他に詩以外でも同じように確固とした自己が持てない優柔不断の兆候が見られ、例えば手の込んだ服装をして描いてもらうという趣味がそうである。一五九一年の肖像画は剣を持ちイヤリングを着けた威勢のよい巻き毛の若者であり、ローレン・ポートレートは大きな黒い帽子をかぶり襟は高価に見えるレースで飾られた元気のないゆううつな恋人であり、アイザック・オリバーの描いた肖像画はひだ襟をつけあごひげを生やしたきちんとした宮廷人であり、一六二〇年の肖像画は古代ローマ市民のがっしりとした体格を暗示するためであろうがローマ市民風の外衣を着てふっくらとした顔つきで凝視している。こういった服装への入念な配慮はダンが紋章を欲しがっていたことや自分の姓に関する言葉遊びやジャック・ダンとドクター・ダンの二重性の虚構と同じ役割を果たすもので、服装に関して一致しないのは違った自分を作り出そうとするダンの性向が明確に表われたものである。窓に自分の名を刻むのと同じようにこれらは全て自分というものを明確にさせようとするためのごまかしである。

頭の中を駆け巡る散漫な気持ちや様々な考えを異常に意識しているので自分と一致するような外の世界の変化を認識しやすかった。いつもダンの興味をそそる様々な物質的存在に対する考え方の一つに物質の存在そのものが無から有への変化を要求しているのだという考え方があった。もちろんこの考え方はダン以前の人々も持っていたものである。世界の創造に関する典型的な神学的問題は世界は何から創られたかということである。答えは三つ可能であった。一つはアリストテレスが賛成したものだが世界はもともとここにあったのだから創造される必要は全くないという考え方。二つ目は『ティマイオス』に由来する新プラトン主義の見解で永遠の物質は神に起因するが神から分離した元々あったもので神はこれを世界の原物質として使ったという考え方。三つ目は神は無から世界をお創りになったという考え方である。この三つ目の考え方はあり得ないことだが神の御心の表れない至高を立証するのでダンの最も気に入ったものである。この考え方はダン存命中には神の創造に関する正統キリスト教理論となっていたものでもあった。

正にこの考え方が正統であるという事実に基づいてダンが神を賛美する言葉や法悦に固執するのである。しかし、この正統性を黙って受け容れたわけではないし、その正統性に伴ってキリスト教教義がダンに信じるように求めた様々なあり得ないことを信じたわけでもなかった。また、原初のものに形を与えるという創造に続く骨の折れる仕事を賞賛することもなかった。ミルトンの『失楽園』に生き生きと描かれた地球とその他のものを神がお造りになったことには明らかに無関心で、

ダンをとりこにしたのは無から有への変わり目であった。聖職叙階に備えている時に書いた『神学論集』の中でこのテーマを選んで書いておりそれだけがダンにとって重要なことだということを示唆している。『神学論集』の中で論点を明確にしながら「この宇宙すべて、大地、海、空気、天、すべてのものがかつては無であった」¹⁶⁾ と考える。説教では得意満面となって、まごつきながらもたびたびこの話題に戻っている。何よりも神に感謝の念を起こすべきだと指摘する。あなた方は人間にしてもらいキリスト教徒にもらったのだから神に感謝すべきである。つまり、神は「あなた方を石にしていたかもしれないし、植物にしていたかもしれないし、獣にしていたかもしれないし」、ユダヤ人にしていたかもしれない。それにしても「あなた方がどこにも存在せず、無であった時に」¹⁷⁾ 神はいやしくもあなた方をお造りになったということは最大の驚きである。それは後の説教で追及しているように「最少のものと無の不一致は最少のものと全世界の不一致以上に計り知れないものがある」¹⁸⁾ からである。無は有の敵なのであるが、神は無を存在の原因とされたのである。

厳密に言えばこれは、もちろんダンは夢中になって思いを巡らせているのだが、考えられないことだ。何かを考えるとということは何かがあるからであって、何もないことは考えられないのだから無は考えられないことである。何かを無にするためには思考の範囲外にある空白の中に押し戻さなければならぬ。つまり、想像できないことを想像しなければならないということになる。こういったことを思索していると無の存在の領域に近づくことができるのでダンは好んでこの種の想像世界に遊んだ。無をとらえようとして思考の働きの薄れて行くのを見るのは詩に見られるように人間が非物質化していくのを見るようなものだ。いずれの場合も非人間化していくという錯覚におちいるがそれが存在するものの不確定さを強めるのである。「何ともわからないもの、それがこの無というものである」¹⁹⁾ とダンは感嘆しながら叫ぶように言う。全てのわからないものが滑り込んでいくようなブラック・ホールであった。

更に、もし神がその支える力をお使いにならなくなったら全てはこのブラック・ホールに滑り込んで行くとダンは信じていた。被造物としての自然は独力で存在することはなく、そのまま存在するためには神の側の間断のない努力が必要なのである。一瞬でも神が注意をそらすと無に呑み込まれることになるであろうと彼は考える。説教ではたびたびこういった偶発性を取り上げているが、『神学論集』で「神を必要としない無つまり神の特別の保護のない無に即座に再び戻ることのない無をお造りになっておられた。天使や我々の魂はこの神への依存からは開放されていない」²⁰⁾ と書いた時に既にこういった偶発性を強く心に留めていたのである。魂は本質的に永遠なのかそれとも神の保護によってのみ永遠なのかということは実のところ論争的であったが、注目すべきはこの二つの仮説を選択するに当たってダンは正統ではない方を採ったことである。魂は他の全てのものと共に神が魂を動かさなかったらすぐさま停止するという彼の考えは一般的なキリスト教の考えとは異なるものであった。²¹⁾ 他の神学上の問題と同様に魂の有り様は究極的には想像力によるものであって、従って、信じる人の想像の仕方が手掛かりとなるのである。ダンは魂にはスイッチを切る能力があり、それがないと永遠に存在することになると信じる方を選んだのだがそれはダンには永遠は好奇心をそそるものではなかったからである。ダンは自分と同じように宇宙も変化するもので

全てのものは絶えず無との境界線上にあってほしかったのでそう考えたのである。

ダンの以上のような選択によって明確になった虚無的状况は「聖ルーシーの日の夜想曲」に満ち溢れている。この詩では創世に先立つ原初の無よりも更に深い喪失感と虚脱感を伴う無に戻ることを願っている。無の第五元素になりたがっており、既にそうなっていると次のように言う。

彼女の死によって (死んだというべきではないが)

このぼくは原初の無の精髓となった。²²⁾

ダンに典型的なことだが思考は二方向に向かう。自己を否定すると同時に自己を肯定するのである。無を求めるけれど自分は「普通の無」ではなく特別な無だと自賛する。無ではあってもその無を区別したがるのである。この非論理性はただダンらしいというだけではなく、愛する人の死によって様々に入り乱れる感情が生まれるのだから心理的にはありうることだと感じさせるものがあるのだ。愛する人を奪われた者が新たに生まれた空疎で荒れた世界を誇り自分達以外の世界を軽蔑して見るのは、その悲しみのために慰めや悲しみからの回復を拒否し全てを亡くした人に捧げるのだからある意味では無私の表れでもあるが、残った自分の存在意義を強く意識するからである。亡き人が大切な人だから亡くした後の闇と寒さをためらうことなく受け容れるのだが、その悲しみのあまりひねくれたことを言うのである。

あなた方恋し合う者よ、あなた達のために

小さな太陽はいま山羊座に入り

そこで得た新しい精力をあなた方に与える。

ことごとく夏を楽しみ給え。

彼女は長い夏の夜の祭りを楽しむのだから

その彼女の元に行く準備がしたい。

今宵は彼女の通夜、彼女の前夜祭、

一年の、そして一日の真夜中だから。

しかしながら、この異常な無への衝動は普通の無への衝動と矛盾する。つまり、異常であるためには何かが、常なるものがなければならないからである。しかし、この混乱はダンを悩ますもう一つの神学的 (心理的) 問題を劇的に表明している。即ち、誰でも、地獄で罰を受けるような者でも、実際に無になりたいと願うことができるかという問題である。説教ではたびたびその可能性を否定しているがその言い方は激しいがごちなく限定的で、ダンがいかにかこの問題に戸惑っているかがわかる。例えば、無に帰ることはできないと主張しながらも、また無に帰ることを考えたとしてもそれを望むことはできないと言いつつも人とは一瞬それを願うものだということを認めている。

人は自分の置かれた惨めな状態から逃れられるように思えるので無を一瞬願うことがある。

しかし、よく考えればそんなことはできない。人がどんなものを願っても 今あるものよりもよいものにならなければならないし、よりよくなったものはどんなものでも無ではないからだ。²³⁾

この考えの一部は聖アウグスチヌスから得たものである。アウグスチヌスは自由意志に関する論文でこの問題を論じた。存在しないものはあるものではなく無で、選択するものがないのなら論理的に選択できないのだから存在しないことを願うのはおかしいことだと彼は決め付ける。ちなみにアウグスチヌスの心の中には人は無を願って自殺するが読者にこういった非論理的行動に心を動かされないようにと忠告しようという気持ちがあったのである。²⁴⁾

自殺願望のあるダンはこの結論に満足したとは思われない。何度もこの問題に立ち帰っているのを見ると彼の関心の強さがわかる。アキナスを読んでいて恐らく自分の疑問を強めたのであろう。アキナスはアウグスチヌスを利用して反対しているからである。地獄で罰を受ける者は地獄で罰を受けるよりは死ぬ方がいいだろうから無になることを選ぶのは確かであり合理的であるとアキナスは指摘する。²⁵⁾ この問題に関するもっと憂うつな瞑想のいくつかを見ると地獄に落とされることのない者も全く同じように無に帰ることを選択できるとダンは思っていたようだ。『危篤時における信心』の中でこの世の惨めな生活を話した後で「嗚呼一体誰が誕生前にこの惨めさを知ることができたらこのような状況でこの世に生まれたがるであろうか」²⁶⁾ と叫ぶ。これは明らかに無に帰りたいという決断は至極当然なので機会が与えられれば誰でもそうするということを認めるものである。

「聖ルーシーの日の夜想曲」に関してフランク・カーモードは次のように言う。「詩人ダンは神学者ダンが不可能だということを要求している。彼は絶えず人間は無に帰ることを望めないという点に繰り返し立ち戻っている。」²⁷⁾ これは後に見られるように二つの点で間違っている。神学者としてのダンは人間は無に帰ることを願えないと首尾一貫して断言しているのではないし、詩人としてのダンは願えることを要求しているのではない。自分は無だと宣言する話者を描き出して矛盾しているのだが無の中でも優れている無だと断言させる。詩と神学が二律背反を起こしながらも同時に非存在ないしは無に不安ながらも魅惑されていることを映し出している。

従って、ダンにとっては世界は無から作り出されたもので絶えず再び無へと消滅していくものである。世界もまたそれを構成する四大元素がそれぞれ果てしなく入れ変るから不安定なのである。宇宙の回転も同質の問題であることをダンは発見したのである。説教で「元素以下のもので構成される四大元素そのものの中でお互いの暗黙の了解なしに変化し変質して行く。空気は液化されると水という固い物質になり、希薄になると火という議論の余地のあるはっきりしない物質になる。」²⁸⁾ と力説する。物質が変化して行く混沌とした状態の中に変りやすい自分の姿を重ね合わせているのである。造り出された自然をじっくりと考えていると流動して行くというイメージが浮かび上がってくる。人も動物も腐敗する物質であり溶解して降った雨のように大地をぬらす。ダンはこれをこの世の全てのものの「流動性」、つまり全ては「腐敗へと流れていく」²⁹⁾ と言い、『危篤時の信心』

で世界は絶えず「変化するために全てが溶解する」と主張する。人間は「大地から作られた像ではなく雪で作られた像であるかのように融けてなくなる。」人間は「溶鉱炉で溶けた鉛や鉄や真鍮のように」³⁰⁾ 溶け出すのである。

ダンの想像によれば多くの被造物が溶け出すので地面は実際に液体に変わる。従って、ダンは「教会の墓地はことごとく墓によって生み出される海や大波でふくれ上がる」³¹⁾ と見るのである。人は信じられないくらいの早さで溶解して行く。「一分間で何マイルも動く太陽、それ以上の距離を動く天界の星も私の身体が地面に向かう程には早くない。」³²⁾ 我々の注意を引くのは恐らくその非現実性である。事実熱があったり体力が急激に衰えていく時にこれを書いたのは事実である。しかし、こういったことを書くのは彼の身体的症状に原因があるというわけではない。ダンがしようとしていることは身体が雷光のような速さで液化して行くことに関して人にぞっとさせるようなことを想像させることである。また、そうするのは溶解するという考えに抗し切れない程に魅力を感じていたからである。彼や他の人々の神との交流も液体化する身体という言葉で語られる。神の審判を受けるには「内臓の液化、融解、溶解」が必要であり、キリスト教徒の喜びは「魂の最奥にある内臓を溶解し液化することが神の慈悲に正しく応ずることである。」³³⁾

説教にはこういったやつぎばやの溶解に満ちているが、恋愛詩では腐敗にしるキリスト教徒の内臓器官にしる内容にふさわしくないので、溶解について書くためには何か違うものを見つけなければならなかった。時には詩のあらゆる隠喩段階で物質の変化する状態に思いを巡らせた。「別れ：涙に寄せて」で涙について起こっていることを見ればこのことがわかる。女性の顔の映った涙が貨幣となりその丸い形とその中に刻まれた小さな肖像が子宮を示唆する。次に苦悩の結実となり落ちて水となる。更に、固まって地球儀となる。涙の形が定まらないのは涙が物質として何によって構成されているのかという想像が絶えず変化して行くからである。

愛に関しても溶解は興奮した時に出る女性器から流れ出るものを示唆し、『魂の遍歴』でベットの猿がアダムの五女ジフテキアに愛を訴える場面にこれを導入している。

目に涙をいっぱい浮かべて彼女の顔をじっと見たり、
赤い手で彼女の子羊の皮のエプロンをこっそり
持ち上げた……怖がったり、おそれたりせず。

初めは無邪気で、猿の意図がわからなかった。
その美德も彼の手にもふれられ、もまれ、なくなった。
むずむずするような温もりを覚えて、すっかり濡れた。³⁴⁾

戯れがその内容であるにもかかわらずこれらの詩行は和やかな感じを喚起し、「赤い」という言葉が動物の手の色だけではなく柔毛におおわれた動物の手の優しさをうまく示唆するという戯れとはいえない効果を生み出している。濡れる女性は「無差別」(「あふれるほどに濡れる女」)にも表されている。ここではうんざりするほどの金持ちの女性が有り余るほどに濡れるという意味が感じ取

れる。また、「別れ：窓にあるぼくの名前に寄せて」では誘惑された女性が濡れる（「あなたの濡れた女」）。「別れ：嘆くのを禁じて」の冒頭に濡れる恋人達がいる。

有徳の人は穏やかにこの世を去り、
魂に去れと言う。
傍らの悲しむ友達の何人かが
今逝った、いやまだだと言う。

だからぼくたちも溶けて、静かに別れよう、
涙の洪水や溜息の嵐を起こさずに。
ぼくたちの愛を俗人に知らせるのは
ぼく達の喜びを冒瀆するようなもの。³⁵⁾

アレン・テイトは「溶ける」という語の奇妙な使い方に注意を引かれ「これまでのこの語の使われ方を見てみてもたとえ二義的な意味でも人の別れに使われるのを見たことがない」³⁶⁾と言う。実際には辞書にこれに合う意味を見つけることは、テイトが言う程には、難しくはない。もちろんこのような敬虔な気を起こさせるような状況にあっても「溶ける」という語が湿った性器（あるいはこの件に関してはテイトが紹介したがるに飽き飽きするような古いエリザベス朝の「死ぬ」という語の持つ性的な語呂合わせ）と関係があるといっても何の問題ともならない。詩中での出来事は恋人二人の身体は別れるのだが魂は別れないということであり、従って二人の身体はあたかも溶けるかのように静かに（これは一七世紀では「溶ける」というのは全く普通の意味である）この場を去ろうとダンと言うのである。しかし、「溶ける」という語が辞書では表しようもない暖かさ、優しさ、おだやかなためらいがこの節の内包する意味に従って少しずつ消えていくのは確かだが、豊かさのあふれるこの語がダンにとって詩的可能性の指標であることも確かだ。

人間だけが溶けるものではない。極地の氷った頂きも「愛の取引」に見られるように溶ける。この詩では女性の美は「たちまち南北両極地の氷を溶かす」し、サマーセットの祝婚歌ではもしフランセス・ハワードの「燃え盛る眼」とサマセットの「愛する心」が凍った北極に運ばれたなら極地を通る貿易ルートも閉ざされなかったであろうとダンは書く。

東や西に通じる航路は解けて
その水からできたあごをいとも簡単にあげひろげる。³⁷⁾

この二行で巨大な水のしたたる口を描いたのはダンが実際にフランセス・ハワードの眼やサマセットの恋情に心を動かされたからではなく、その中に地球規模で溶けるものを書くという口実を見つけたからである。群島への航海についてダンが書いた書簡詩の「風」では船そのものが溶け始める。

嵐の時に海水が流れ出たように、今タールが流れ出ている。
教会が燃え上がる時に屋根から流れ出る鉛のようだ。³⁸⁾

炎上する教会の明喩は船板から漏れるコーキング材によるものである。教会の屋根の鉛が溶けてしたり落ちてやがて建物全体が栓を抜かれて噴出するかのよう鉛におおわれる。ダンの残存している最も初期に属するものとはほぼ確信される「腕輪」では十二枚の金貨、生きたものでもある、を溶鉱炉で溶かすことについて才気ある議論を展開している。³⁹⁾

身体が皮下組織に集まる液体で腫れるという病的状態つまり水腫病はあらゆる病気の中でも最もダンの関心を引いたものである。水腫病患者はダンの詩に繰り返し描かれており、エレジー「彼の恋人に」の「海綿のように酒を欲しがらるオランダ人」、香水の「水腫病のお父さん」、嵐の大波にとらわれ「塩水でふくれあがって詰まった」船のように通常極めて気まぐれに引っ張り出されている。他のいつも頭の中にあって想像するものと同様に水腫病はダンが改宗した時に霊的な用途に合わせて変えなければならなかった。妻の死に関するソネットに見られる神への言葉でこの変更が行なわれていることがわかる。

あなたを見出し、あなたは私の渴きをいやしてくださったが、
聖なる渴きは水腫病のように私を溶かす。⁴⁰⁾

ダンには神に満たされているが更に満たされたいのである。憧れと溶解が彼の想像力の中では一つにつながっているのである。神は究極的な水である。『二周年記念の歌』でダンには自分の魂に向かって死に際して魂が完全に潜ることができるようになるまで自分を膨らましてくれるように促す。

絶えず喉を乾かして死ぬまでずっと飲み続けよ。
そのように水腫病にかかることが唯一の健康法である。⁴¹⁾

表面的にはダンの関心は恋愛から宗教へと変っているがそれでも液化という考えにとらわれている。液体のイメージはただ状況が変わっただけで続いているので、恋愛詩の世界を溺れさせたり農地を水びたしにしたり世界を溺れさせる大量の涙が慎重な変更過程をへて「聖なるソネット」では世界を溺れさせる血や涙の洪水となる。⁴²⁾

水腫病を何度も使う内に海綿に関心を持つようになった。それは海綿の液体を吸い込んだり吐き出したりする力が他のどれよりも優れているからである。身体の各部と海綿——「海綿のような目」「海綿のような肝臓」⁴³⁾——を融合させ読者を怒らせることもなく海綿のしゃれに没頭し勝ちになるのである。説教の真っ最中に会衆に向かってこう教える。

……あふれるほど一杯になった海綿を思い起こしてください。小指で押せば水が出ます。
そう、持ち上げれば水がしたたり落ちる。右でも左でも置いた位置を変えれば水が溢れ出す。

そう、そのままにしておいてもそこを濡らす。水分が出るのです。⁴⁴⁾

楽しそうにこの水分を含んだおもちゃで水をはねかけながら、つかる程のお金を持っていて、脅されると「血を吐く」思いでお金を出す金持ちのイメージとして海綿を使っているのだという説明をすることによって最終的には海綿を宗教の域に引き上げようとする。これに大した意味があるわけでもないがダンの心中では宗教上の教えと関係づけられているのである。その関係は気ままなものでダンが話したがっているのは海綿であって人は弁解しなければならないほどたくさんお金を持っているはずはないのである。他の説教で「全ての人は海綿でしかないが、水分を含んだ海綿を右の手に置いても左の手に置いても水が出るだろう」⁴⁵⁾と言う。

変化に応じて水が出たり水を吸ったりするのはダンにとっては溶解と同じように訴える力があつた。他の正統なキリスト教徒と同じく魂の非物質性を信じるとダンは言明しているが、あたかも液体であるかのように魂は流出したり吸入したりするとよく言う。「恍惚」の中で恋人二人の魂について「一方の魂がもう一方の魂に流入する」と言い、魂は死ぬと身体を離れ神によって「栄光の中に吸い上げられる」と会衆に向かって言う。実際全ての創造された宇宙は「神の中に吸われ飲み込まれる」⁴⁶⁾と言う。水の動きは彼の注意を引く最も初期の詩の主題の一つでもあつた。「不従従」では水が流れて行く時にいかに様々な変化に対応しているかということが——「お追従の渦巻き」となって堤を乗り越えたり、水につかって水面に「キス」をしたり、枝の周りで顔を歪ませてしかめ面をする——熱心に詳しく説明されている。⁴⁷⁾「気変わり」でダンが結びの句で描写するものは水紋から生まれたものである。

気変わりは

歌と喜びと生命とそして永遠を育むもの。⁴⁸⁾

既に見たように彼はこれらと同様に変化に関して暗い見方をすることもできたのだが書かなかつた。しかし、変化そのものや水に関する強い関心が弱まることは決してなかつた。川や海は地理学的な場所としてではなく——川や海に地球上の特定の場所を与えることはほぼなかつた——魅力的な形のないもの、つまり正体不明のかたまりとして彼の作品に広く表されている。神学的な議論を導き出しながら「大きな河の水の減少」と「流れの浅いところで気ままな円を描く渦巻き」とを明確に区別しようとするのである。ダンは「世界は海だ」と言い、干潮、満潮や大海原、嵐に満ちた海の暗喩にあふれた渦を巻くような一節を付け加えて世界は海だという考え方を正当化しようとするのである。説教の中では病気、災害、老衰が海のうねりや嵐として見られており我々の内面意識の深さやその変化も同様に水に見つけることができる。歩き回っていると人の心の中で海がうねり、よるめく。「分別をためらう海」「罪を意識する海」「心の悲しみに飲み込まれ沈む海。」⁴⁹⁾海——あいまいで、名づけようもなく、計り知れない——はダン自身がとらわれている分解し吸い込まれていく現実の原型であつた。

現代人の一人ウォルター・ペイターがこの点でダンに近いように思われる。オックスフォードの北で姉妹と共に同性愛への欲求を抑えながら落ち着いた生活をしているヴィクトリア時代の著名人に機知の王と共通するところが多いとは思えないのだからこう言うのはおかしいかもしれないが、二人共それ相当に深いフラストレーションを抱えた人物で現実を何か絶えず強く奪うものとして見ていると考えることは役に立つものと思われる。いずれにしても二人が似ていることは間違いない。我々の身体は絶え間なく動いており——「血液の循環、眼のレンズの消耗と修復、光線を受けたり音が聞こえてきたりする度ごとの脳の組織の調整」——思考や感情を持つ人間内部の世界では事態は今も尚一層悪くなっているとペイターは言う。

渦巻きは更に早くなり、炎は一層激しく焼き尽くそうとしている。もうだんだん眼がぼやけたり、堤防から色が消えて行くということもなく——岸辺の動き、水は動いていないように見えるのに実際は流れ落ちている——中流の激しい流れに乗って風景と激しい感情と思考が瞬間的に浮かび流れていく。……分析が止まるのは印象や心象や感覚が変化して解体するためである。間断のない消滅、自分自身の異様で絶え間のない組み立てと解体。』⁵⁰⁾

この引用でペイターはヘラクレイトスに言及しているのだがこの変化に関するヘラクレイトスの説はダンも知っていたことであろう。しかし、ペイターがダンを知る必要がないのと同様にダンはヘラクレイトスを知る必要はなかった。「出典」の問題ではなく想像力の類似の問題である。

人生の破滅に対する唯一の正しい反応は感覚に従うことで我々に割り当てられた時間の中でできる限りたくさん生命の脈拍を詰め込むことであるとペイターは言う。

全てが足下に溶けて行く時激しく熱狂させてくれるものならどんなものでもつかもうとするのは、知的視野を広げることによって瞬間であれ精神を開放させてくれそうな知識に貢献するようなものは何でも、あるいは感覚を刺激してくれるもの、見たこともないような色合い、色、珍しい香り、芸術家の手になる作品、友人の顔なら何でもつかもうとするのはもっともなことだ。⁵¹⁾

この自己耽溺の処方箋はペイターの彼より責任のある同時代人達を憤慨させたがこれによってオスカー・ワイルドその他の審美主義者達の熱狂的な尊敬を得た。ペイター自身は自分のことばかり考え過ぎていて彼の見解が刺激となって起こるであろう騒ぎを予知することはできなくてその結果にショックを受けて苦しんだ。この騒ぎを起こした一節は『ルネッサンス』の第二版から、この本が「本を手にした若者の何人かでも迷わせる」⁵²⁾ といけないのでとペイターは述べているが、削除された。しかし、ダンには溶けていく世界という想像あるいはその結果から守ってくれる人は誰もいなかったが一九八〇年代のペイターの後継者達と常に共通する不安定症候群のいくつかが見られる。若い頃には、既に見たように、しゃれ者で放蕩者であった。審美主義者達のように生気に満ちた感覚を磨く業を身につけ偏狭な心の持ち主を怒らせ楽しんでた。性的差別に賛意を示す「無

差別」や「愛の高利貸し」のような詩と同様「比喩」にはこの二つの傾向が見られる。ワイルドがそうであったように扱いにくくて破壊的な風刺詩に優れることが魅力的であったし、審美主義者達がそうであったように男らしくないと思われることに反抗的な喜びを得ていたようだ。ダンは「香水」の中で香水をいつもつけているからめめしいと言われていることを自慢している。

最も重要なことはペイターもダンも瞬間とその瞬間を捕らえることに重点を置いていたことである。「一瞬一瞬手ないしは顔で或る形が完全になっていくのだ。」「瞬間々々を区別しないため取るべき熱意のある心構えは……、霜と太陽のこんな一日の短い日には、暗くなる前に眠ることだ」とペイターは警告する。時間を一連の分離できる断片と考えることによって時間を固定しようとする衝動はダンの詩の背後にあって詩を支配しようとする要因となっている。ダンは瞬間の詩人である。他のエリザベス朝の詩人達とは異なり一般的な叙情性を好むようなことはない。ダン独自の例を引き合いにして人生をつかみとる。「さて、君は丸一日ぼくを愛してくれた」「さ、目覚めたぼくらの魂おはようさん」「今宵は一年の真夜中、一日の真夜中」「ここが私の劇の最終場面」「今夜が世界最後の夜であったとしてもどうということはない。」⁵³⁾ 詩行の中で太陽がカーテンを通して射す瞬間、涙が落ちる瞬間、二人の唇の離れる瞬間——「さあさあ、最後の惜別の口付けもここまで」⁵⁴⁾ ——を捉えて策略を巡らすのである。最初の二語のあえぎながらもなだめようとするリズム、次に語を発音する時に尖らす口、このような無理な言葉遣いをするのは心が情熱を言葉にしようと模索する時のわずかな一瞬を捉えるためである。

時間を止めようという願望が「影法師に関する講釈」で明らかにされている。真昼の眼が大きく開いてまぶしいと感じる一瞬を率直に満たされた愛の表象として使っている。恋人二人の別の歩み、太陽、影が相交わって一つのもとなる。一瞬生命あるものが石像と同様に明確な形をとる。

じっとしていてごらん。
君に愛の哲学の講釈をしてあげよう。
この三時間君と僕は歩いてきた。
その間二人の影法師がついてきたが、
それは僕たちが作ったものだ。
でも、今は太陽が丁度真上に昇ったので
僕たちはその影法師を踏んで立ち、
すべてのものはみごとな透明の光の中にいる。
僕らの幼い愛が成長していく中で、
偽装や影が僕たちや僕たちの気づかいから
流れ出たが、今はそうではない。⁵⁵⁾

偽装や影の「流出」が止まる。時間がその息を止めるのである。次の瞬間再び生命は生き返る。第二節が始まると世界は疑いと不安で崩壊する。二人の愛が「この正午」に留まらない限り新しい影法師が生まれると女性に警告する。以前はせんさく好きな世間から愛を隠していたのに今また再び

お互いを偽る努力をしなければならなくなる。そうなれば愛は終わってしまう。

愛は輝きを増す光，輝く中天の光。

正午を一分でも過ぎるともう夜の闇。

しかし、こうならないようにするにはどうしたらよいのか。どうやって太陽を留め、影を留めるのか。ダンには詩をこういった素材の中に入れて愛の崩壊を確かなものとする。愛には正午と同じように続く可能性があるが、第二連に表された嫉妬深いためらいのために「みごとな透明のひかり」はもう消えてしまっている。詩自体が崩壊するのである。

時の流れの中からつかみ取られた瞬間はこのようにダンにとって魅力的であると同時に絶望の源であった。瞬間に関する想いが宗教に向かうとこれら特別な瞬間とその重要性を伝えなければならないという緊迫した気持ちにとられるのである。彼の想像力の基礎をなしてきたこういった考えが長く心の中であって表面に出てきたのである。説教をしている間にあたかも会衆を脅し、自らも脅して注意を喚起するかのようによく願し、脅迫し、奨励しながら今の瞬間に飛びかかる。「立て今、今この瞬間に」「この瞬間に、早くキリストを捜せ、さあ今。」⁵⁶⁾ まさに会衆が逃げ出そうとしているその時に会衆に聖なる恐怖を充分感じさせながらこのような攻撃をしかけるのは時間がどんどん過ぎて説教壇の砂時計の砂が落ち切ろうとする説教の最後の時であった。

砂時計が一分残っていたら、我慢して聞く気が一分あったら（会衆にはない）私の話を聞いて下さい。この残された一分は今お話しているあの永遠のことなのです。この一分にあの永遠がかかっているのです。この一分神はあなた方の中にいらっしゃって、あなた方一人一人の心に耳を当てて何とあなた方の心に話し掛けて欲しいのかを聞いておられる。この一分にあなた方が神を受け容れて祝福されるのか、神をはばんで災いをもたらすのか。⁵⁷⁾

無理やり何度も繰り返すのはダンが脅しがっていること表しているだけではなくその脅しが確実ではないことも伝わってくる。実際この人騒がせな戦法の論拠には疑わしいものがある。キリスト教徒は神はいつも自分達の思いはわかっておられるものと信じているからである。ある特定の瞬間に神がキリスト教徒の心に耳を傾けると会衆に伝えるのは情報としては心臓は鼓動しているというのと同じ程度のものである。従って、危機感はない。しかし、ダンがこういった話を作り上げるのは事態を危機に至らしめる無定形で漂う日々の生活を越えさせるためである。

瞬間へのペイターの憧れとダンのそれとの間には似たものがあるが、ダンの変化に対する姿勢はペイターよりずっと生気あふれ、ずっと変化に富む。ペイターの散文は上流階級相手の葬儀屋の散文のように変化が上品であるのと同時に厳粛な雰囲気の中に包み込まれている。ダンには女性の不貞に関する詩でよく嘲笑するがペイターはそのようなことを夢にも思わなかったことであろう。また、ペイターは自分や自分の友達を少量のカルシュームや燐に変えてしまうような絶えず変化する物質界に対して熱狂的な反応を示すことはなかった。が、ダンにはできた。変化が彼を生き生きとさせた。

永遠同様変化への対抗策を考えるために想像力を駆使している時は液化とか溶解に興奮している時と同じように精神活動が活発だったのである。

- 1) 『祝婚歌』 32ページ, 『説教集』 第6巻 324ページ
- 2) T.E. テリル著 『ジョン・ダンの初期の読書に関するノート』 *MLN* 43 1928年 318~319ページ
- 3) 『パラドックス』 I
- 4) 『危篤時の信心』 54ページ (「諫言 VIII」)
- 5) 『偽殉教者』 序文
- 6) 『聖なる詩』 15ページ
- 7) 『説教集』 第7巻 264~265ページ
- 8) 『説教集』 第10巻 56ページ
- 9) 『説教集』 第5巻 249ページ
- 10) 『説教集』 第3巻 110ページ
- 11) ゴス, 第1巻 306ページ
- 12) 『説教集』 第9巻 134ページ
- 13) ゴス, 第1巻 191ページ
- 14) 『風刺詩』 70ページ
- 15) 『エレジー』 56ページ
- 16) 『神学論集』 14ページ
- 17) 『説教集』 第1巻 249・273ページ, 第4巻 148ページ, 第6巻 124ページ, 第8巻 176ページ
- 18) 『説教集』 第3巻 50ページ 及び 第2巻 247ページ
- 19) 『説教集』 第4巻 100ページ 及び 85ページ
- 20) 『神学論集』 76ページ
- 21) アーノルド・ウィリアムズ著 『一般的解説』 チャペル・ヒル ノースカロライナ 1984年 80ページ
- 22) 『エレジー』 85ページ
- 23) 『説教集』 第4巻 85ページ
- 24) アウグスチヌス著 『自由意志の選択』 Bk.III 第7章
- 25) アクィナス 『神学大全』 III Q-98 Art. 3
- 26) 『危篤時の信心』 72ページ (「瞑想 XI」)
- 27) フランク・カーモド著 『ジョン・ダン』 1961年 23ページ
- 28) 『説教集』 第7巻 271ページ 及び 第3巻 227ページ, 第9巻 305ページ
- 29) 『説教集』 第7巻 259ページ
- 30) 『危篤時の信心』 12ページ (「瞑想 II」)
- 31) 『説教集』 第1巻 266ページ
- 32) 『危篤時の信心』 13ページ (「瞑想 II」)
- 33) 『説教集』 第4巻 70・159ページ, 第9巻 154・177ページ
- 34) 『風刺詩』 45ページ
- 35) 『エレジー』 62~63ページ
- 36) アレン・テイト著 『死の瞬間』 *Sewanee Review* 61 1953年 76~81ページ
- 37) 『祝婚歌』 14ページ
- 38) 『風刺詩』 58ページ
- 39) 『エレジー』 1~4ページ
- 40) 『聖なる詩』 15ページ
- 41) 『祝婚歌』 42ページ
- 42) 『エレジー』 69・85・74ページ, 『聖なる詩』 8ページ
- 43) 『エレジー』 41ページ, 『風刺詩』 45ページ
- 44) 『説教集』 第3巻 65ページ

- 45) 『説教集』 第4巻 337ページ
- 46) 『説教集』 第10巻 52ページ, 第8巻 62ページ等, 第7巻 217ページ
- 47) 『エレジー』 11ページ
- 48) 『エレジー』 20ページ
- 49) 『説教集』 第1巻 230ページ, 第2巻 306ページ, 第3巻 127ページ
- 50) ウォルター・ペイター著 『選集』 ハロルド・ブルーム編 ニューヨーク 1974年 59~60ページ
- 51) 同上 60~61ページ
- 52) マイケル・リーヴィ著 『ウォルター・ペイターの場合』 1978年 144・183ページ参照
- 53) 『エレジー』 42・70・84ページ, 『聖なる詩』 7・10ページ この点に関してはロバート・エルロウ著 『英国形而上詩人の私的靈感と時代精神』 参照 パリ 1960年 第1巻 第1章 82~84ページ
- 54) 『エレジー』 36ページ
- 55) 『エレジー』 78~79ページ
- 56) 『説教集』 第3巻 133ページ, 第1巻 250ページ
- 57) 『説教集』 第7巻 368~369ページ

(2006年12月5日 受理)